

空

平成30年7月31日発行

第16巻3号

通巻第79号

空



2018・6・7

SORA 79号

夜涼

柴田 佐知子

水に沿ふ道の明るきお中日

驚いて貌の平たき子猫かな

沖を見る遍路杖にて岩押さえ

子を攫ふ丈となりたる夏の草

杖どこに立てても灼くる現世かな

滴りを鼓動としたり修験の地

滝壺へ入りゆく行者みな白く

折り皺のとほりに畳む鯉幟

腸の透けて窓辺の目高かな

化け猫の影を大きく夏芝居

夏座敷大きな卓のあるばかり

配膳の指美しき河鹿宿

翅たたむやうに座したる夜涼かな

山なみを月の渡れる夏料理

福岡 高倉 和子

東京 中田みなみ

如月や線路の下の水早し

茂吉忌や山の色なるずんだ餅

涅槃図へ長き廊下の続きけり

津浪来し入江一望鳥巢立つ

春泥を石もて落し寺に入る

蝌蚪生れ教室の声あいうえお

屈託のなき青空や揚雲雀

この鳥を出ぬ松蟬の鳴き出せり

春月の船と一緒に揺れてをり

松蟬や抹茶の菓子に殿の紋

春障子閉めて読経を始めけり

船出まで小さな句座や松の花

見得を切る眉の太さや宵の春

写真屋に請はれて笑まふ猫柳

鞆をためらふ齡となりにけり

ゴム風船縮みながらに不満言ふ

福岡 柴川志津子

熊崎 荒井千佐代

杖をのみたのみ故郷の青き踏む

己が魂おのが支へて牡丹雪

友情の淡くなりゆく金鳳華

春節や猫に与ふる小籠包

彼岸餅本家分家と配り合ふ

さへづれり湾も運河も凧の刻

雪柳ゆれて隣家の留守長し

らんたん祭囃は濃すぎる程が佳し

石落とし深さうかがふ夏はじめ

眠るとき眼裏まつ赤春節祭

葉桜の下に乗り捨て三輪車

姉妹みな逝つてしまへり春の星

指さして何でも欲しき祭の子

鶴帰る微動だにせぬ湾の面

夜の渡御おとなしき馬ほめながら

染玉子抱きて海辺の一本道

埼玉 服部 早苗

福岡 岸 洋子

「序の舞」を軸とし床の梅一枝

山は空広げてゐたり土佐水木

鱸酒に酔へば相弟子師の話

老いひとり棚田繕ふ桜南風

御朱印のまだ湿りゐる梅の花

波しぶき葉ばかり伸ぶる野水仙

早春や折り目正しき鶴に息

鳥除けの網をくぐりて初蝶来

雛市や姫街道に町屋の灯

まつたうに生きほろにがき露の臺

雛の夜やよはひ確かめ合ひもする

これといふ欲しきものなし草青む

老残の塵を戴く日陰雪

押入れの好きな子とゐて暖かし

三尺の草魚があるじ水温む

のど飴の終りは噛みて春の宵

北九州 深川 淑枝

寒明の馬磨かるる遠嶺晴

蹄鉄に鏘兆す馬春浅し

春の雪野より戻りし馬匂ふ

たてがみに触れてより風光りだす

山焼の着火器銃のごとく持ち

山焼や余熱の残る開拓碑

山焼の炎に煽られし顔洗ふ

猛りたる山火は狼の墓標

広島 戸栗 末廣

木の杭に魚の群れゐる寒の明け

満ち潮の音立てて来る利休の忌

薄氷の岸を離るる七七忌

幼な子のきれいな言葉日脚伸ぶ

野の池に色来つつあり猟名残

結界を灯す蠟燭鳥雲に

待つといふしづけさにあり雛の間

涅槃図へ亀が急いであるところ

福岡 角野良生

らしくともらしくなくとも初日の出

ひび割れて黴呼びびてこそ鏡餅

凍らむと水の張りつめぬたりけり

寒鯉に動かぬ重さありにけり

引き揚げの海雪舞鶴雪止

縮緬は丹後の雪の重さかな

大般若経にどやされ厄落とす

裸木に裸の快樂ありにけり



千葉 原 友 子

寒雷やずしんと山の夜が更くる
 山が夜の色となりゆく根深汁
 行く年や四方に借りある心地して
 除夜の鐘けふがあしたとなるばかり
 初茜父母の知らざる世を生きて

糸 島 小 林 朱 夏

うぶすなの焚火に知らぬ人ばかり
 鮫鱈の死んでも水を打たれをり
 綿虫の気ままを少し見てをりぬ
 象の眼に雲の湧き出す冬日和
 遠き日は遠き日のまま龍の玉

太宰府 西住三恵子

早々に鶏より奪ふ寒卵
 寒鯉捌く神水を存分に
 梟を静かな鳥と思ひけり
 暮早し石採る山に灯の一つ
 花吹雪返信無用の文届く

粕 屋 吉 田 菫

いまでも匂ふ縄文の樟冬ぬくし
 田遊びや神域に松二本立て
 田遊びや藁の大蛇の尾を貰ふ
 田遊び果つ干柿の福いただきて
 子の姿見えぬ田遊び守り継ぐ

熊本 松田 明子

鈴りんの音の澄みし輪となる寒灯下
寒気まだ張り付く服を吊しけり
雪の中バス根の国を行くごとし
大鯰をぶら下げて行く里の家
頂の一人ひとりに初明り

長崎 松尾 龍之介

箒の目しかと立てをり神の留守
良き間合ひ保ち群なす浮寝鳥
枯葦を包んでゐたる日ざしかな
石路咲いて玄海の紺定まりぬ
褒められて脱げなくなりし冬帽子

糸田 宮井 知英

波状岩あらふ黒潮厄おとし
遠洋航海大寒の水脈を引き
着ぶくれて恙遠ざけみたりけり
凍てゆるむ灯にかざし見る爪のいろ
黒猫の容赦なきくろ年暮るる

長崎 仲里 奈央

競走馬の睫毛の砂や十二月
糠雨に杉の香強し初社
どんど焼山河に戻すものばかり
青竹より蒸気たばしるどんど焼
羽根蒲団掛くれば手足伸びにけり

大宰府 山本 則男

歳晚やお茶売る声を赤くして
牛小屋で牛磨かれて初明り
水餅となりしばらくは忘らるる
木の匂ふ材木店の初句会
火の硝子吹けば七色雪しぐれ

大野城 森田 明成

春風やむかし血を見ぬ時代劇
猫の頭の打たれ撫でられ桃の花
譲り合ふ公園の椅子花ふぶき
潮の香や菜の花を挿す無人駅
葉桜や御堂にもらふ握り飯

福岡 永淵 恵子

空つぼのジャングルジムや冬日影
静脈の浮き出る拳寒波来る
粕汁や我に縁なき武勇伝
足少しのべて湯婆浄土かな
ポインセチア硝子なきかに拭き上ぐる

粕屋 秋 千晴

しばらくは頭の中で年用意
段取りのメモに始まる年用意
大杉に触れて身を反るお元日
雑煮餅一つで足らふ身となりぬ
空晴れてこの世の人の賀状受く

須 惠 苑 火 耶

初めての話のやうに聞く炬燵
立ちしまま座りしままの雛かな
また母に叱られてゐる春のゆめ
歩むほど空の近づく遍路かな
濡縁に湯呑み伏せある遍路宿

兵 庫 岩 井 京 子

枯葦や疲れし水に影おとす
ぼろ市や写真のモンロー束ね売り
抜け道の露地に演歌のやうな雪
一葉の女所帯や縫始
佇めば菜の花畑の黄にめまひ

兵 庫 林 徹 也

割り算で分けて余りとなる苺
雛飾る母の背中を支へけり
沼埋めて大明神の花の宴
廃校に残る記念碑初雲雀
声上がる方へ駆け出す磯遊び

福 岡 山 内 碧

雪のせて沈んでゆきし錦鯉
着ぶくれてコーラス団の口まろし
姿見にまかせ帯結ふ冬うらら
満天星の赤し洞門ただ青し
紅梅や光となりて巫女走る